

第19回トウキョウサンショウウオ・シンポジウム 「(続) 両生類にまつわる最近の様々な話題」

2017年3月11日(土)
トヨタドライビングスクール東京

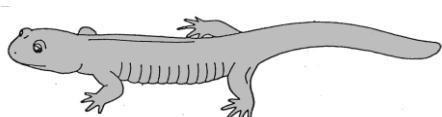
所在地：〒190-0021 東京都立川市羽衣町 1-3-4 JR 中央線立川駅、多摩都市モノレール立川南駅より徒歩 10 分。JR 南武線西国立駅より徒歩 5 分。
電話：Tel : 042-526-3551

1999年より開催されてきたトウキョウサンショウウオ・シンポジウムは、毎年全国より多数の研究者・保全活動家・ファンが集まって情報交換できる貴重な場として回を重ね、今年でとうとう19回目をむかえました。今年は、近年サンショウウオ達の脅威となっているアライグマなど、産卵場に訪れる様々な来訪者をカメラトラップで調査した結果や、多摩地区の地質に関する話題を取り上げました。また、日本中のサンショウウオを撮影しているカメラマンによる日本産の美しいサンショウウオや、古くから台湾でサンショウウオの調査をしてきた研究者による動画を混じえた現地のサンショウウオの紹介もあります。

主催／トウキョウサンショウウオ研究会
事務局(川上洋一)：東京都あきる野市平沢 473-6 Tel&FAX 042-550-0265
問い合わせ先：草野 保(首都大・理工・生命科学) Tel 042-677-1111(内線 3761)
<http://salamander.la.coocan.jp/salamander/>

プログラム

- 12:50 受付開始
- 13:10 開会(司会：川上洋一)
- 13:15 講演 **青梅市のカエル池におけるカメラトラップ調査**
竹下実生(東京農大・野生動物研究会)
- 13:55 講演 **両生類と哺乳類などの捕食者の繋がり：特にアライグマの行動など**
パブロ・アパリシオ(森林レンジャーあきる野)
- 14:35 講演 **多摩地区における地形・地質の生い立ちと生物の関係：タマノカンアオを中心にして**
小泉武栄
- 15:15 休憩
- 15:30 スライド上映・講演 **日本各地のサンショウウオの写真紹介**
川添亘広(爬虫両生類雑誌書籍の編集者)
- 16:00 講演 **台湾のサンショウウオについて**
飯塚光司(千代田区立神田一橋中学校通信教育課程)
- 16:40 連絡・後片付けなど
- 17:00 閉会(閉会後に懇親会を予定しております。)



両生類と哺乳類などの捕食者の繋がり：特にアライグマの行動など

パブロ アパリシオ・フェルナンデス（森林レンジャーあきる野）

あきる野市で、昆虫から哺乳類まで、主に両生類や鳥類の調査や保護活動を行っているレンジャー隊員です。

・テーマ

両生類と捕食者「哺乳類」による被害の事例。

*内容

現在、増加し続ける様々な哺乳類による被害、特に両生類の繁殖期には大きな捕食圧が見られます。主にトウキョウサンショウウオの保全活動で、野生化したアライグマを中心に調査し、確認した被害を詳細に解説します。また、アライグマと他の哺乳類の行動の比較などを動画で紹介し、あきる野市で行われている保全活動の一つである、アライグマやハクビシンの外来種の捕獲の推移を発表します。



哺乳類による産卵場荒廃や捕食被害の様子。

西多摩地域におけるカンアオイ類の分布と地形・地質の生い立ち

小泉武栄（元東京学芸大学地生態学研究室）

西多摩地域には、カントウカンアオイ、タマノカンアオイ、ランヨウアオイの3種類のカンアオイ属の植物が分布する。筆者は、青梅から町田にいたる丘陵地を対象にした現地踏査によって、3種の分布の詳細を明らかにし、分布図を作成した。そしてその上で分布地域の形成要因について植物地理学的な視点から考察を行った。

カントウカンアオイは、四万十帯の小仏層群や秩父帯からなる硬い基盤岩の分布地域（関東山地）に分布の中心があり、そこから青梅・永山丘陵や草花丘陵、それに加住丘陵の西側半分にはみ出したような分布を示し、狭山丘陵にも広く分布する。一方、タマノカンアオイは多摩丘陵北西部に分布の中心をもち、そこから加住丘陵の東側半分（滝山城址付近から東）にはり出したような分布を示す。また狭山丘陵の南端部にも分布する。ランヨウアオイは多摩丘陵の西端部にわずかに分布する。

タマノカンアオイとタマノカンアオイの2種は明瞭なすみわけを示すが、その原因として、次のような古地理の変遷が関わっていると推論した。70万年ほど前から、関東山地の隆起に伴って、前縁の浅海や低地、扇状地も陸化・隆起し始め、永山丘陵や草花丘陵、加住丘陵、多摩丘陵等の原形ができた。そこには元々小仏層群等の硬い岩盤からなる山地地域に生育していたカントウカンアオイが、山地地域からはみ出すように分布を拡大した。

しかし40～50万年ほど前には、丹沢山地から東に流れる古相模川がもたらした御殿崎礫層が、多摩丘陵の西部から狭山丘陵付近まで広がる広大な扇状地を作り、その堆積地域ではカントウカンアオイはごく一部を除き、消滅した。古相模川の洪水が運んできた礫質の堆積物が、カントウカンアオイの生育に適していなかったのだろうと推測できる。多摩丘陵の北西部、加住丘陵の東部、狭山丘陵の南端部、ならびにこの3地域に囲まれた範囲が、カントウカンアオイの消滅した地域に該当する。この空白域に、分布を拡大したのがタマノカンアオイである。タマノカンアオイは30万年ほどの間にこの空白地域に分布を拡大した。

その後、古相模川は、河川争奪により南に向きを変え、現在の相模川に近い流路を流れようになった。相模原の河岸段丘の形成期から推定すると、流路の変更は20数万年前に起こったようである。一方、多摩川の方は、10万年ほど前、それまでの狭山丘陵の北を流れる流路から、南を流れるよう流路を変え、当座は武藏野台地の上を流れた。その後、流路を次第に南に変えたため、そこにあった丘陵地やかつての古相模川の扇状地は、多摩川の浸食によって、北から南に順次削り取られ、その結果、タマノカンアオイの分布地は、狭山丘陵と多摩丘陵側に大きく分断された。また浅川がハ王子の盆地中央を大きく浸食したため、多摩丘陵と加住丘陵の間にもタマノカンアオイの分布しない地域が生じた。このような地形・地質の生い立ちがカンアオイ類2種の分布を決めたと考える。

なお当日はカンアオイ類の分布拡大に関わる地表変動や、葉の寿命についても若干の知見を紹介する。